

誓子の蝨斯

横川知之

美作大学・美作大学短期大学部紀要
(通巻第53号抜刷)

論文

誓子の蝻斯せいのむしりす

Grasshoppers are special beings in Seisshi's haiku.

横川知之

キーワード：俳句、誓子、蝻斯

誓子の句集を読んでいると、「蝻斯」の句が多く目につく。

『山口誓子全集』の中には、「蝻斯」の句が四一句もある。

実は、誓子の俳句に出てくる動物の頻度は、次のようになってい

一位が「蟋蟀」(139)、二位が「蟬」(116)、三位が「百舌鳥」(96)。

以下、「蝶」(92)「蟹」(91)「蛭」(77)「馬」(68)「鶉」(66)「犬」(62)「雀」

(53)「蟻」(47)「蟻地獄」(45)「牛」(44)「つくつく法師」(44)で、「蝻

斯」(41)は、一五位にランクされている。(注……括弧内数字は素材の

頻度を表す。以下同様 なお「つくつく法師」は蟬の仲間であるが、秋

の季節なので分けてカウントした)

それでは、他の俳人は、「蝻斯」をどの程度取り上げているかを概観

してみると、次のようになる。

子規(1)、虚子(1)、秋桜子(7)、草田男(13)。

データから見る限り、草田男以前の代表的な俳人は、「蝻斯」を、俳

句の素材として注目することは無かったようである。

その理由として考えられるのは、「蝻斯」に俳句の素材としての魅力

が乏しかったということである。

もっとも、古い時代には、「蟋蟀」を「きりぎりす」と訓じ、虫たちを総称していた。それに、「蝻斯」には「機織はたおり」という別称もあるので、注意を要する。

たとえば、「箆へらふせておけば晝鳴くきりぎりす」子規、「すのこふめばはたと鳴きやむきりぎりす」虚子などの句は、作者が「蟋蟀」を「蝻斯」と称したものが、「蝻斯」を本来の「蝻斯」として詠んだものかの判別が難しい。

ちなみに、山本健吉編『最新俳句歳時記』文藝春秋社刊によると、「蝻斯」は、次のように解説されている。

緑または褐色で、蝗に似て大きく、土用から初秋へかけて主として昼間チョンギースと鳴く。暑い盛りに好んで鳴く。肉食性がある。昔きりぎりすと言ったのはこおろぎのことであり、きりぎりすのことは機織と言った。その鳴声が機織のまねきを踏む音と、箆を打つ音に似ているからである。
……略……天明以前は、コオロギを詠んだものである。

注……引用文の傍線は引用に際して付けた。以下同様。

また、復本一郎監修『俳句の鳥・虫図鑑』成美堂出版には、
「秋の虫の多くが、日暮れてから鳴くのに対して『キリギリス』は昼日中から鳴く」と解説されている。

次に、誓子以前の代表的な俳人の「蝻斯」(対象が現在の蝻斯に特定されるもののみ)の句を掲げてみると、次のようになる。

狭筵に機織鳴けば足寒し 子規「寒山落木」明治26年
機織虫の鳴り響きつつ飛びにけり 虚子「六百句」昭和16年

潮けぶり岩礁にたてりきりぎりす 秋桜子「蘆刈」昭和13年

きりぎりすいぶかりきくに波幾重 秋桜子「霜林」昭和25年
きりぎりす時を刻みて限りなし 草田男「火の鳥」昭和11年
詮じあふ少年の知慧きりぎりす 草田男「火の鳥」昭和13年

いっぽう、誓子の句は、

きりぎりすながき白晝啼き翳る 「七曜」昭和15年
病者また長年を期すきりぎりす 「晩刻」昭和21年
きりぎりす生くるかぎりは句を選ぶ 「青女」昭和23年
一灣の潮のしづもるきりぎりす 「和服」昭和24年
ひかりもの憂しこの世のもの憂しきりぎりす 「和服」昭和26年

さらに、誓子の句集別に「蝨斯」の頻度を見てみると、

『七曜』(7)、続く『激浪』(1)、『晩刻』(16)、『青女』(8)、『和服』(7)、『構橋』(2)となっている。

データから、誓子が多く「蝨斯」句を詠んだのは、『七曜』(7)(昭和一五年)と、『晩刻』(16)(昭和二一年)であることが明らかになる。実は、誓子は、昭和十五年の六月には体調を崩し、伊豆の川奈で静養し、九月にも強羅で静養している。

そして、昭和二十一年の六月には、親戚の薦めもあり、四日市の富田から少し北に位置する天ヶ須賀へ転居している。

昭和十五年と言えば、戦時社会の弾圧が色濃くなり「京大俳句事件」のような忌まわしい事件が起こった年でもある。

また、昭和二十一年といえは、戦後の混乱期で、桑原武夫の「第二芸術」論が発表された年でもある。

そのような時代状況を踏まえて、誓子の「蝨斯」句を味わうと、さらに興味深い。

ちなみに、最初に多くの「蝨斯」句を掲載した『七曜』の編輯後記に、誓子は、

これは、曩の「炎晝」に續くわが第四句集。

昭和十三年八月より四箇年の作四百六十餘句を收む。

この間殆ど療養に終始す。

昭和十五年、作風に轉換を試み、爾來病に屈せず、句作に従ふ。

と、記している。

そして、この前後から、誓子は、その俳句の素材選びや句風に強い影響を受けた「茂吉」の研究にのめり込んでいく。

ところで、「蝨斯」と言えば、私たちは、『イソップ物語』の中の「アリとキリギリス」の話の思い起こすことが多い。

「アリは、暑い夏の間、冬に備えて食べ物を集めている。ところが、キリギリスは歌を歌って遊び暮らし、いっこうに働こうとしない。やがて、寒い冬が来て、食べ物に困ったキリギリスは、アリに食べ物を分けてもらおうとする……」というあのお話である。そこで、私たちの「キリギリス」のイメージと言えば、「役立たずの怠け者」で、「アリ」の勤勉なイメージとは対照的だ。

また、誓子の句には「蝨斯」をはじめ、「地を這う物」が多い。

ちなみに、それらを多い順に列挙してみると、

「蟋蟀」(139)「蟹」(91)「蟻」(47)「蝨斯」(41)「蜥蜴」(40)「蠼螂」(39)「蛇」(28)「油虫」(23)「穀象」(14)「百足虫」(14)の順になる。

誓子の句に、このように「地を這う物」が多いのは、外出した時に、俯いて歩くことが多かったからである。

その辺りの事情は、誓子が、「蟋蟀が深き地中をのぞき込む」の句を自解した時、次のように述べていることにも伺える。

その頃、私は蹠んで地上の虫などをよく見た、俯いていることが多かった。地上にはいろんな虫がいた。私にはそのふるまいが一々面白かった。

『自選自解 山口誓子集』白鳳社 昭和四四年

ところで、誓子の『自選自解 山口誓子集』白鳳社 昭和四四年刊には、「蝨斯」の句が三句紹介されている。

きりぎりす光は陰と地をわかつ 『七曜』 昭和15年

一灣の潮しづもるきりぎりす 『和服』 昭和24年

ひかりもの憂しこの世のもの憂しきりぎりす 『和服』 昭和26年

ために、「一灣の」句の解説を引用すると、次のようになっていた。

「一灣」の「湾」は、伊勢湾である。私は、その頃、白子の海岸にいた。

「きりぎりす」は、「ぎす」。ぎーすちよんと鳴く。秋の虫である。

きりぎりすが、海の近くのくさむらで鳴いている。海は、伊勢湾、大きな海だ。それが全体しんとしづまりかえっている。海がしづまるといいうのは、そこに充滿している潮がしづまりかえっているのである。

「一灣」の「一」は、全体のことだ。「潮」は、その全体に充滿しているものだ。大きな寂靜の、すぐ近くに、かすかなれども、きりぎりすが、鳴きつづけている。静と微音、これがこの句の骨格だ。

津と知多半島とをつなぐ線に、伊勢湾の最も深いところがある。そこがその湾の一番しづかなところだ。白子は、その近くにあるのだ。

昭和二十四年作『和服』所載

この句には、大きな「伊勢湾」と向き合うちっほけな「きりぎりす」が描かれている。そして、この頃（昭和二四年）になると、この「きりぎりす」ひいては「誓子」も、大きな世界に「ひるむこと」も「ためらうこと」もなく対峙する矜持を獲ており、読者の感動を誘う。

ちなみに、誓子が、先の『自選自解 山口誓子集』白鳳社の中で、自句を解説しているのは、二百十五句のみである。

当然、季節の重なりは少ないが、その中の動物の頻度を見ると、蝶（4）蟹（4）蟋蟀（4）螢（4）に次いで、蝨斯（3）蜥蜴（3）と続く。

これまで著者は、誓子が詠む「蝶」「蟋蟀」「蜥蜴」「油虫」等の動物素材について、様々な視点から検証を続けているが、どの素材にも、誓子独特の「思い入れ」がこめられている。

もちろん、「自選自解」の対象となった句は、鑑賞者の反響に応えたものや、自らの自信作などである。だからこそ、他の素材を押しつけて「蝨斯」が多く選ばれていることは、注目に値するのである。

このように見てくると、「蝨斯」の句を多く詠んでいた頃の誓子は、病に冒され仕事もせず散策などで体を癒す自分の姿を「蝨斯」に見立て、自虐的に嘲笑していたのではないかと思える。

そのように考えてはじめて「病者また長年を期すきりぎりす」の句や、「きりぎりす生くるかざりは句を選ぶ」などの句には、誓子の当時の境涯が色濃く投影されているのが、よく分かる。

もちろん、そのような見方は、戦時体制や戦後の混乱期にある日本全体の風潮からみた誓子の見方（見え方）である。世間の人から見れば、毎日、句作にふけり、付近を散歩する誓子の姿は、いかに病療養中の身とはいえ、「蝨斯」以外の何者でも無い。

だから、誓子は、外出した時、俯くことが多かったのである。

その誓子が、「一灣の」句の境地にまで至るには、いま少し時間がかかる。

（よこがわ・ともゆき／横川知之）

Grasshoppers are special beings in Seishi's haiku.